新潮日本古典集成

紫式部日記　紫式部集

山本利達　校注

新潮社版

新潮日本古典集成（第三五回）

紫式部日記（むらさきしきぶにっき） 紫式部集（むらさきしきぶしゅう）

昭和五十五年二月五日 印刷
昭和五十五年二月十日 発行

校注者 山本利達（やまもと りたつ）
発行者 佐藤亮一
印刷所 大日本印刷株式会社
発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
電話 東京03（二六六）五一一一（業務）
東京03（二六六）五四一一（編集）
振替 東京 四－八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

定価 一四〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

© Ritatsu Yamamoto, Printed in Japan, 1980.

目次

凡例……三
紫式部日記……九
紫式部集……一一三
解説……一六五
付録
むらさき式部集……一九九
栄花物語……二三七
主場面想定図……二三九
図録……二四五
系図……二五四
初句索引……二五九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

凡例

紫式部は、『源氏物語』の他に、『紫式部日記』と『紫式部集』を遺している。この日記と歌集は、それぞれに独自の価値をもつものであるが、作者自らの人となりを伝えるものでもある。本書はこの二つの作品を収めた。

一、『紫式部日記』は、宮内庁書陵部蔵の通称黒川本を、また、『紫式部集』は、古本系の最善本である陽明文庫蔵本を底本とし、諸本により校定した。

一、校定に当っては頭注に記したところもあるが、一々についてはあげなかった。

一、本文の読解を容易にするため、適宜、仮名に漢字を宛て、読みにくいかと思われる漢字には振り仮名を付した。仮名づかいは歴史的仮名づかいに改め、漢字は現行の字体を用いた。また、句読点、濁点をほどこし、会話には「　」をほどこした。

一、『紫式部日記』は次の要領によった。

(1)注は傍注（色刷り）ならびに頭注による。現代語訳、人物の指示は傍注で、説明は頭注でという原則であるが、スペースや印刷面の関係で頭注にまわした場合もある。

(2)本文を適宜段落に分け、段落毎の内容を要約した小見出しを頭注欄に色刷りで掲げ、また、小見

出しのいくつかを統轄する大見出しを頭注上部にゴチックで示す。

(3)頭注のスペースを利用して、＊印で単なる現代語訳では及びえない各段落内の要約や解説をする。

(4)頭注において、人名の読み方の不明のものは音読するものとしてルビを付さない。

(5)傍注には、会話の話者を（　）で、主語その他、文脈上のおぎないを〔　〕によって、それぞれ色刷りで示す。

(6)歌は二字下げ別行とし、上・下句二行書きにする。

(7)後一条天皇誕生の折の『御産部類記不知記』は三種類あるが、頭注においては区別せず『不知記』と略称し、また、『御堂関白記』を『関白記』と略称する。

(8)本文中には、人物に関して鎌倉時代以前に後人のつけた注が入っている。これは現存のどの写本にも存するものであり、参考になるので、活字を七ポにしてのこす。

一、『紫式部集』は次の要領によった。

(1)歌の各句間を一字分あけ、各々の歌の上に、アラビア数字により番号をつけ、底本の歌の順序を示す。

(2)頭注では、詞書、左注等についての注解や、歌の現代語訳（色刷り）と語釈、および作歌事情についての解説をする。

(3)詞書、左注等の注解には注番号を付して頭注で説明する。

(4)歌の語釈欄では、語意、枕詞、序詞、懸詞、縁語などについて、◇印を付して説明する。

(5)鑑賞の手引として、配列上同類のものを頭注欄に＊印を付して指摘する。

一、巻末の解説には、作者の伝記及び作品についての見解を要約して述べた。

一、定家本『紫式部集』の最善本とされる実践女子大学本の『むらさき式部集』と、そのうち勅撰集と『夫木和歌抄』とにとられているものを付録にあげ、古本との比較の便宜をはかった。

一、『紫式部集』巻末の「日記歌」のうち、日記にない五首の背景となった記事を、付録として『栄花物語』の「初花」の巻より抜き出した。

一、読者の理解の便を考え、付録として巻末に主な場面の想定図、図録、登場人物に関係ある系図、初句索引をのせた。

一、底本の使用や翻刻を許可して下さった宮内庁書陵部、陽明文庫、実践女子大学図書館に対し感謝したい。

一、注釈については、先学の諸注や研究に負うところが多いことは勿論であるが、『紫式部日記』の注においては、大阪国文談話会中古部会の方々から多くの教示を受けた。

紫式部日記　紫式部集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

紫式部日記

御産まで――寛弘五年秋　　**土御門殿の有様**

一　一条天皇の中宮彰子の父藤原道長の邸。土御門大路の南、京極大路の西にあり、南北に二町を占めていた。一町は約一二〇メートル四方。彰子は、お産のため、寛弘五年（一〇〇八）七月十六日からここに退出していた。

二　寝殿（寝殿造りの正殿）のわきを通して、南の池に引き入れてある細い流れ。

三　昼夜間断なく読経すること。一昼夜を十二時に分け、十二人の僧が輪番で行うのが一般である。ここは中宮の安産を祈るため。

四　貴人をさし、中宮彰子のこと。当時二十一歳。

五　出家しようと思っている作者の心をさすという説があるが、この世を憂きものと思う心であろう。

六　一方ではそんな自分の心が不思議に思われる。

＊　お産の近づいた中宮の態度の立派さを見るにつけ、この世を憂きものと思う日頃の作者の心はすっかり消えてしまう。このように中宮を讃美することはこの日記の主題である。

言いようもなく秋のけはひ入り立つままに、土御門殿のありさま、いはむかたなく風情がある池のほとりのあちこちの梢をかし。池のわたりのこずゑども、遣水のほとりの叢、おのがじし一面に色づいて色づきわたりつつ、この頃の空もおほかたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御読経の声々、一段としんみり身にしみるあはれまさりけり。やうやう涼しき風のけはひに、例の絶えせぬ遣水のせせらぎが水のおとなひ、夜通し読経の声とまざり合って聞える風が次第に涼しくなると夜もすがら聞きまがはさる。

御前にも、近うさぶらふ女房達が人々、はかなき物語とりとめもない話をするのをお聞きになりながらするを聞こしめしつ

〔お身重で〕さぞお苦しくてあられるだろうに

つ、なやましうおはしますべかめるを、何げないふうにとりつくろっていらっしさりげなくもてかくさせたまへる御ありさまなどの、ご立派なことは今更言うまでもないがいとさらなることなれど、憂き世のなぐさめには、このようなご立派な方の所を探し求めてお仕えすべきであるとかかる御前をこそたづね参るべかりけれと、五平常の心持ちうつし心をばひきたがへ、たとえようもなく一切の憂いが消えるにつけてもたとしへなくよろづわすらるるにも、六かつはあやし。

五壇の御修法

まだ夜明けに遠い頃の
まだ夜深きほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子まぬりなばや」「女官はいまだまだ出仕していないでしょうぬりなばや」「女官はいまだまだ出仕していないでしょうろふほどに、後夜の鉦うちおどろかして、五壇の御修法の時はじめつ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされたるほど、おどろおどろしくたふとし。

観音院の僧正、東の対より、二十人の伴僧をひきゐて御加持まゐりたまふ足音、渡殿の橋のとどろとどろと踏みならさるるさへぞ、ことごとのけはひには似ぬ。法住寺の座主は馬場の御殿、へんち寺の僧都は文殿などに、うちつれたる浄衣姿にて、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間をわけて帰り入るほども、はるかに見やらるるここちしてあはれなり。さいさ阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。人々参りつれば夜も明けぬ。

渡殿の戸口の局に見出だせば、ほのうち霧りたる朝の露もまだ落

一 「格子まゐる」は、格子を上げたり下ろしたりする行為の謙譲語。
二 下級の官女。ここは中宮の掃司であろう。
三 中宮の女蔵人。下臈の女房。
四 一日に六回行う勤行の一つで、午前三時頃行う。
五 不動・降三世・軍荼利・大威徳・金剛夜叉の各明王を祭る五つの護摩壇を設け、山門（延暦寺）・寺門（三井寺）・東寺が合同で行う祈禱。「時」はお勤め。
六 導師に従って修法に参列する僧。
七 権僧正勝算。寺門派。不動明王の壇を受持つ。「観音院」は山城国愛宕郡北岩倉にあった。
八 寝殿の東にある建物。五壇の御修法は東の対で行われ、中宮は寝殿の東母屋にいた。観音院の僧正は渡殿を渡り、加持に行くのである。「加持」は手に印を結び陀羅尼を唱える真言密教の祈禱。御修法の後で祈禱を受ける人に親近して行われる。
九 寝殿と対とを結ぶ渡廊下。ここは南側の透渡殿。
一〇 「法性寺」の誤りで大僧都慶円か。山門派。降三世明王の壇を受持つ。法性寺は九条河原にあった。
一一 馬場に面した殿舎。この時は僧の控所とした。
一二 「浄土寺」の誤りで権少僧都明救か。山門派。金剛夜叉明王の壇を受持つ。
一三 文書を納めておく書庫。この時は僧の控所。
一四 欄干のある唐様の橋。池の島にかけてあった。

暗いのに
上げしたいものね
言い合っているうちに
眼をさまさせて
荘重で
〔寝殿へ〕お加持に参上なさる
どしどしと
ほかの場合の雰囲気とは違っている
趣向をこらした
〔退出に際して〕
女官たちが出仕してくると
局から外を眺めると

一五「さいき」の誤りで斎祇か。勝算の弟子で寺門派。大納言藤原道綱の子。大威徳明王の壇を受持つ。「阿闍梨」は密教の秘法の伝授を受けた僧。

一六 この渡殿は寝殿と東の対を結ぶ北側のもので、ここに局が三つあり、作者の局は東端にあったらしい。「局」は、板や壁、あるいは屏風や障子で仕切った女房の居間。

一七 公卿の家の主人をさす尊称。ここは道長。当時正二位左大臣で、四十三歳。

一八 上皇・大臣・納言等の護衛のため勅宣により与えられる近衛府の下級の武官。人数は官の高下で異なる。

一九 朝起きたままで、まだ化粧をしていない顔。

二〇（露に美しく染められた）女郎花の盛りの色を見ますと、分けへだてをして露の置いてくれない私のみにくさが身にしみて感じられます。

二一 白露は分けへだてをして置いてはいないだろう。女郎花は（美しくなろうとする）自分の心で美しく染まっているのだろう。

＊ 朝早くから中宮の御殿の周囲の整備に心を配る反面、作者と風流を楽しむ道長への讃美である。

二二 中宮の上臈女房。大納言道綱の女豊子。中宮の従姉。

二三 讃岐守大江清通の妻。

二四 道長の長男頼通。母倫子。当時正三位で十七歳。寶子か長押に腰をおろし、簾の下端をあげ、局の中へ頭をいれているのであろう。

若い頼通のすばらしさ

ちぬに、一七殿ありかせたまひて、一八御随身召して、遣水はらはせたまふ。

〔渡殿の〕橋の南なる女郎花のいみじうさかりなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いとはづかしげなるに、わが朝顔の思ひ知らるれば、一九〔殿が〕「これおそくてはわろからむ」とのたまはするにことつけて、硯のもとに寄りぬ。

二〇女郎花さかりの色を見るからに

露のわきける身こそしらるれ

「あな、と」とほほゑみて硯召し出づ。

二一白露はわきてもおかじ女郎花

心からにや色の染むらむ

しめやかなる夕暮に、宰相の君と二人、物語してゐたるに、二三殿の三位の君、二四簾のつま引きあげてゐたまふ。年のほどよりは、いとおとなしく心にくきさまして、「人はなほ心ばへこそかたきものなめ

遣水のごみをお除かせになる
庭をお歩きになって
顔をお出しになった
〔殿は〕硯をさし出すよう仰せになる
〔殿が〕この花の歌を暇どっては興がないだろう
お姿が
とてもご立派なのにつけても
早いこと
女は何といっても性格〔がよいということ〕はむずかしい様子をして

一「女郎花おほかる野辺に宿りせばあやなくあだの名をや立ちなむ」（『古今集』秋上、小野美材）の一句を、美しい女の人の多い所に長居していると浮名が立つだろうから帰ろう、の意をこめて歌ったのである。

二 その場にふさわしい歌や詩の一節を朗誦する男の風流を、物語の中ではよくほめている。

三 当時権中納言藤原行成が播磨守で、参議藤原有国が播磨権守であったが、二人ともこの日記では別称により敬語を用いているので疑問。日記執筆当時の該当者平生昌かとする説もある。

四 碁に負けた側が饗応すること。先に中宮の前で碁の試合があり、後日、負けわざが行われ、播磨守が行事係だったのであろう。

五 洲や浜辺の景色を作った飾り物の台。

六 机や台の足をそらして装飾をほどこしたもの。

七 洲や浜辺の作り物の水辺に「紀の国の」の歌が散らし書きにされていたのであろう。

八 紀の国の白良の浜で拾うというこの碁石は、君の御代と共に末長くあって、巌となりますように。中宮の御代をことほいだものと思われる。

九 負けわざの折、勝った方に多くの扇が贈られ、それを持っていたのであろう。天禄四年円融院資子内親王乱碁歌合の負けわざにも趣向をこらした扇が多く贈られている。

八月二十余日　さるべき人宿直・里居の女房参上

男女関係の話をしんみりとなさっていらっしゃる様子は幼稚だ

れ」など、世の物語しめじめとしておはするけはひ、をさなしと人

軽くおあしらい申していたのは間違いだったと　きまり悪いほど立派に見える　うちとけた話

のあなづりきこゆることあしけれと、はづかしげに見ゆ。うちとけ

にならない程度で　口ずさんでお立ちになった

ぬほどにて、「おほかる野辺に」とうち誦じて立ちたまひにしさま

こそ、物語にほめたる男のここちしはべりしか。かばかりなること

この程度のちょっとしたこと　その当座はおもしろいと思ったことで

の、うち思ひ出でらるるもあり、そのをりはをかしきことの、過ぎ

どういうことかしら

ぬれば忘るるもあるはいかなるぞ。

[私は]ちょっと実家に退出していたので

播磨の守、碁の負けわざしける日、あからさまにまかでて、のち

見せていただいたところ　風情が出してあって

にぞ御盤のさまなど見たまへしかば、華足などゆゑゆゑしくして、

[次の歌が]

洲浜のほとりの水に書きまぜたり。

紀の国のしららの浜にひろふてふ

この石こそはいはほともなれ

趣向をこらしたのを

扇どももをかしきを、そのころは人々持たり。

八月二十余日のほどよりは、上達部・殿上人ども、宿直すべき人はみな　さるべきはみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com